



昭和45年(1970年)

3月号(No. 297)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文

エベレスト登山出発に当って	松方 三郎	1
松方三郎氏出発		1
エベレスト隊歓迎会		2
エベレスト中隊出発		2
テンジン氏来日		2
エベレスト隊富士山行		2
エベレスト本隊出発		2
新・爺蘭土雑記(完)・藤島 敏男		3
山岳 64 年内容予告		3
山日記への意見		3
東海支部マカルー隊出発		3
マカルー学術登山隊の高所医学研究		5
アフガニスタンの登山に関する留意事項		6
成田安輝の消息わかる		6
エベレスト登山募金状況報告		7
会務報告		
二月理事評議員会		9
会員異動		10
ルーム日誌		10
新入会員		11
図書室便り		
新刊図書受入報告		9
定期刊行物受入報告		10
図書委員会報告		10
その他		
スキー懇親会のお知らせ		10
J・フランコ氏との交歓会		10

ジェネラル・ブルースの心境

エベレスト登山出発に当って

隊長 松方三郎

出発に当って、何も感慨がないとい
っては嘘である。日本山岳会として
は宿望のエベレストである。山、山と
いつて暮した五十年、ぼく個人として
も、こんな隊に加って行ける有難さは
身にしてみているのである。ただ隊長と
いう名には、本人少々こだわらざるを
得ない。だが、そんな看板でもなければ、
到底仲間には入れないのだから、
諸兄の寛容に甘えて一行について行く
のである。戦後エベレストに志した隊
の隊長は、荷物を背ってサウス・コル
に登ったり、南峰近くまで迫ったりし
ている。残念ながらぼくにはそんなサ
ポートは最早やできない。せいぜい床
几にかけた信玄か、ジェネラル・ブル
ースといったら、知らない人は、
それでも采配を振っていると思うだろ
うが、アイスフォールの下からでは、
そんなことは望むべくもない。せいぜ
いのところベス・キャンプ村の村長
——それが無事動まれば望外の幸せだ

——と思っている。
しかし登山隊は違う。総勢二十九人
という規模も規模だが、これだけ多彩
な隊員を集めた隊は例が少いと思う。
皆んなの経験を集めると、世界の山と
いう山の大方の経験が揃っている。戦
後、水河の経験のあるものは、日本
中に数える程しかいなかった。今では
百単位なのである。この十五年間の変
化なのだが、一体どうしてこんなこと
になったのか、とくに驚くべき事実
なのである。数えてみると、登山
隊、科学班併せて二十九人のうち、二
十六人が海外での登山経験者である。
平均年齢三十一、科学班を除くと三十
ぼくを入れても三十二、エベレスト隊
としては若い方だといえる。(これま
でにエベレストの頂上立った三十四
人の平均年齢は三十三となっている。)
年齢や人数で隊の強弱を論ずること
はできないが、隊員個々が、それぞ

いろいろなところで山に登った経歴を
持っていること、ことに昨年春秋の二
次にわたる踏査隊員が加わっているこ
と、さらにまたこの冬を山の中で越し
た二人がいることは、何としても大き
な強味である。
南面からの登路開拓を計画に取入れ
たことは、隊員の数が増えた大きな原
因だが、最近数年間のネパール・ヒマ
ラヤのプランクが考慮の中に入ってい
ることも事実である。曾つてのよう
にシェルバが役立つものであるかどう
かそんなところは今後の経験ではじめ
て判ることなのだ。この数年の間に名
の知れたシェルバの多くは引退したり
国外に出てしまっているからである。
問題の南面については、日本隊は現
在のところ何処の誰よりもたゞさんの
知識をもっている。いうまでもなく秋
の踏査の賜物なのだが、その実際の経
験によって、どこに問題があるかも、
大よその見当がつくに至った。秋の踏
査は、それ自体としても、エベレスト
登山に一つの新しい時代を開いた大
きな意味をもつものだった。その時
得られた経験と知識とによって、今回
の本隊は問題を具体的につかんで、計
画を立てることができたわけだ。

もちろん頂上に登ることは、どのル
ートによるかには関係なく、それその
ものとして今回の計画の目的だから
順序としては、まず、サウス・コルの
ルートをつめて登頂の目的を達し、そ
れを追って南面の壁に当ることになる
だろう。今度行ってみて南面の春の状
態が果してどんなものであるか、そ
れは行って見なければ判らない。
正面玄関のアイス・フォールが最初
の難場であることは、今さら説明する
必要もないことだ。これを安全に越す
こと、そして荷物をウェスターン・ク
ームに担ぎ上げること、この第一段階
の仕事が、隊にとっては最初の課題で
あるが、それから先きも、毎日毎日が
試験の連続だといわなければならな
い。そして最後の八百m、これが最大
の問題であることは、行かないでも見
当はつく。
考えてみれば問題は無限にある。ベ
ス・キャンプに帰りつくまでの三カ
月、日々の課題と取組んで行かねばな
らぬ話になるが、そもそも山が好き
で始まったことなのだから、大いに楽
しく暮して来たいものだとも考えてい
る。

松方三郎氏カトマンズへ

エベレスト隊長松方三郎氏と隊員
中島寛高氏は三月九日午前十一時五十
分羽田発のJAL機でカトマンズへ向
け出発した。カトマンズからルンバ
でさらに飛行機を利用し、三月下旬ベ
ス・キャンプで本隊と合流し、本格
的な登山を開始する。

その点、今度の隊は素晴らしい隊だと
思う。科学班についても期待は大き
い。あれだけの大きな山に、これほど
の人力と装備を投じて、ただ頂上に登
りました、というだけで終わったので
は、やはり何か欠けているように思
う。ことにネパールという国の立場に
立ってみると、これだけの登山隊な
らば、何か役に立つデータを集め、残
して来なくてはならないと思うのであ
る。ドクター四人というのは、それだ
けでも相当なことだが、科学班として
考えれば、これは大いに意味のあるこ
とだ。気象のデータに至っては、井上
君が秋から山に残って観測を継続して
来ているから、貴重な資料となること
は間違いない。
書いてみると、書きたいことは山ほ
どあるが、向うに行つてからもいろ
いろ報告する機会があるだろうから、ビ
ントのあったお話は後日のことにしよ
う。

エベレスト隊欽送会

エベレスト登山隊欽送会は二月十日午後四時二十分から千代田区紀尾井町ホテル・ニューオータニ芙蓉の間で本会、NHK、毎日新聞社の共催で開かれた。

正面に日の丸とネパール国旗を掲げた会場には坂田文部、愛知外務の両大臣、タクル駐日ネパール大使夫妻、前田NHK会長、田中毎日新聞社会長をはじめ関係者六百余人が集まり、加藤エベレスト本部長の開会の辞に続き、三田会長のあいさつ後、松方隊長が一人づつ隊員を紹介し、秩父宮妃殿下のお言葉(別掲)について日章旗が妃殿下から隊長に手渡され、盛んな拍手が沸いた。坂田、タクル、田中、前田の各氏からあいさつがあり、最後に松方隊長がお礼と決意を述べ盛会のうちに終わった。

秩父宮妃殿下のお言葉(要旨)

山岳会がいよいよエベレストを目指して出発するに当たり、今日出席した皆さんの元気な顔を見ることの出来たのは心からの喜びであります。故宮様が登山をこよなく好み、終始ヒマラヤに心を引かれていたことを思い、マナスルに続く今回の壮挙を聞き非常な感激を覚えます。

松方氏はいまだ四十数年前マッターホルンに故宮様と同行されておられるひとしお感慨が深いものがあります。隊員は女性を含み、非常に豊かな登山歴を持つと聞きますが、これも日本の国力の現われと思います。くいのない行動をとられ、成功し、元気に帰国することを心からお祈りして、あいさついたします。

エベレスト隊中発隊出発

エベレスト登山隊第二陣住吉仙也、

平林克敏、松浦輝夫、長田正行の四名は二月八日午前十一時半羽田発のバキスタン航空機で出発した。

テンジン・ノルゲイ氏来日

エベレスト登頂のシェルバのテンジン・ノルゲイ氏はTBSテレビの「兼高かおる世界の旅」十周年記念番組に出演のため、五年ぶりに旧うとう二十七日単身来日した。本会では番組出演後三十日より一月五日までエベレスト登頂のアドバイスを受けるため同氏を招待し、種々と交歓を行なった。

十二月三十日、一月三日の間は、ちょうどお正月のため、東京にいても仕方がないとテンジン氏の希望もあって八方尾根にスキーにでかけた。年末より正月にかけての最も混雑する時期であったにもかかわらず、会員竹節作太氏のお骨折により、白馬の東急ホテルに宿泊できることになった。同氏に厚く御礼申上げる。

このスキー同行の同行者は、エベレスト隊員の田村宏明、土肥正毅、渡部節子、神崎忠男の四名、昼間は愉しくすべり、夜はエベレスト登山についてのアドバイス、優秀なシェルバの紹介等を受けた。テンジン氏の印象、最もおどろいたことは人の多いこと、ゲレンデは森の樹木よりも人が多かった。ヨーロッパでスキーの経験のあるテンジン氏もこのスキー人口にはさすがに驚いた様子。三日はトラフィック事情悪く十二時間を要して、午後十一時宿舎の山の上ホテルへ帰着。

一月四日はエベレスト登山隊員の初顔合せの日で、全隊員が事務所集合していった。ここに挨拶に顔を出したテンジン氏は、「今年は一九七〇年、登頂すれば第七登、自分もエベレストに初見参してから十七年目に登ったし、また初登頂しから今年にはちょうど十七

年目、すべてラッキー・セブンにかこまれているので、南壁からの登頂間違いなし」とスピーチを一言、エベレスト隊員を激励した。その後、エベレスト隊の神崎忠男隊長の運送で、三田会長、旧知の須田紀子嬢と箱根ヘドライヴ、強羅の環水楼で一泊、翌五日、富士の眺望を楽しんで帰京。午後は、ショッピングに忙がしい時をすごし、十八時三十分のPPA機でカルカタへ向け帰国の途についた。

(松田)

エベレスト隊富士山行

エベレスト登山準備委員会は、各種機械、装備、登攀用具などのテストを隊員の親睦を兼ね富士山で行ない、一応の成果をおさめた。なおこの期間中七合目付近で遭難中の登山者を救援するという一幕もあって喜ばれた。

テスト項目とその内容

(イ) エンジン・ジェネレーター
ベイスキャンパで各種の観測、調査および医学的調査のための電源を必要とするので低圧、低温で動作するようその改良と扱い方。

(ロ) 加圧テントと酸素発生器
八〇〇〇m以上では酸素の量はほぼ海面の三分の一といわれる。そのため

に起る人体の衰弱とその障害を十分に克服するため酸素ボンベ以外にコンプレッサーで加圧することによってテント内の気圧を上げ、いながらにして低地へ下山したと同じ状態を作り出そうとするもの。

(ハ) テント台

南壁では七二〇〇m以上で適当なテントサイトを見つけるのが困難なため、水壁に、水平な台を組み立て、その上にテントを設営しようとするもの。

(ニ) 酸素

今回開発した国産マスクとレギュレーターとのテスト。背負子への取り付け方法ならびにその使用要項。特に南壁で使用するために開発されたトップがボンベを背負わないでラストがゴムホースで送り込むという全く新しい自動供給方式。

(ホ) 通信機

南壁で使用された特に耐寒性のすぐれた通信機と、一方では非常に軽量の国産通信機の性能検査。

(ヘ) 特殊テント

南壁の高所において使用する吊り下げ式のテント。

(ニ) ウィンチと滑車

荷上げ困難な南壁において効率よく荷上げしようとするもの。

(イ) 個人装備と登攀用具
羽毛服、ユマール、アイスマス、二重靴、三重靴、アタックアイゼン。

(ロ) 適性、性格検査

(ハ) 運動負担心電図

日程

一月十日 九時半山岳会を、バスと報道関係の二台のジープで出発。一時にスハライン終点到着、二時佐藤小屋、ただちに(イ)、(ロ)のテスト、夜はミーティングと(ロ)の酸素発生器、(ニ)の取扱説明事項、(ロ)の実施。

一月十一日 小屋付近で(ロ)の加圧テントと(ハ)、七合目付近までの登攀中に(イ)、(ロ)、(ハ)の性能テスト。

昼食は小屋で採り二時出発。三時五合目よりバスで下山。山麓の忍野鉾泉、新平田で反省会と今後の課題を検討。後に懇親会に移る。アルコールが入って、開け広げに登頂の意欲を交換しあった。

一月十二日、朝八時半忍野を後に十一時半山岳会に帰着。

(土肥正毅)

エベレスト本隊出発

エベレスト本隊本隊長以下二十六名は二月十五日午後零時六分羽田発のバキスタン航空機で出発した。総勢三十九人というヒマラヤ登山史上最大の登山隊だけにロビーは関係者、家族、友人などでごったがえし、特別室で三田会長のあいさつとあつ、日高信六郎名誉会員の音頭で乾杯し航空機に乗り込んだ。一行は同夜バキスタンのダッカで一泊、二月十六日カトマンズ入り。すでに現地で荷物輸送を始めている先発隊十一人と合流、二月二十日キャラバンを開始し、三月二十日ベイス・キャンプ入りをす。

大塚登攀隊長の話 山登りは準備が大変で出発にこぎつけたら登山の三分の一は終わったようなもの。隊員のコンディションも上々で初の試みである南壁も天候に恵まれさえすればやれる自信は十分である。全国から寄せられた多くの支援を全隊員身しりみ感じており、ベストをつくしてきた。

会費納入のお願い 本年度会費未納の方は至急御送金下さい。東京 神奈川、千葉、埼玉在住者三千円。地方会員二千五百円です。

新・爺蘭土雜記(完)

藤島 敏男

カメラのこと 私は旧弊だから、いままでカラー写真をとったことがない。近年は昭和九年に買った黒ライカにヘクトールF二・五という、旧式なカメラで黑白写真しかうつさない。N・Zへもこれで行くつもりだったが、かの美しき国で色写真をとってこないという方はないと、大反対にあった。生れてはじめての色写真では、一枚ごとに露出を考えねばならぬ、そんなことでは折角の旅のたのしさが、半減してしまふ。写真のために旅に出るのではないから、出来るだけ手間もかからず、頭も使わないで済ませたい。ながいあいだ使っている、古ライカならば何の心配もないのだが、どうしても

山岳第64年内容予告

- ・グリーンランド氷床の横断 池田錦重
- ・パタゴニア氷床横断 阪上秀太郎
- ・富士山と私 松方三郎
- ・回想の日高山脈 相川 修
- ・ランガール山脈 立花種則
- ・イストル・オ・ナールとジロ 佐藤京子
- ・シャール・イ・アンジューマン登頂 高木泰夫
- ・アルゼンチン中央アンデス 川上 隆
- ・の登山 阿部重男
- ・ボリビア・アンデス 吉田三郎
- ・メルセデリオ南壁 栗林一路
- ・マールカス・ペーカール 吉野 勲
- ・パンジャブ・ヒマラヤ 宮崎英子
- ・日印合同登山 早川慎治
- ・羅白岳と硫黄岳の原名 田中栄蔵
- ・追悼 近藤茂吉氏(成瀬岩雄・田辺

のかと考えた。そこで思いついたのは、近頃のカメラは馬鹿でもチョンでも精進見でも押せばうつる仕掛になっているということだ。それでいこう。年をとってモロロクにいるが、まだ馬鹿チョン精進の域には到らないつもりだから、押せばうつるのをひとつ購入することにしたら。カメラに詳しい友達に、その辺にゴロゴロいるから、アドバイスをは自由しろい。

私はN・Zから帰国して後、別に写真の何かに発表したり、売りこんだりするつもりもない、ただ旅の思い出になればよいというのだから、注文はつけなかった。その結果は、キャン・ン・ダイヤル35-2というものが手に入った。ナンダあんなものかと、言われるのは覚悟の上だ。これをテストも何もしないで持参、クライストチャーチの

空港で一枚目をうつした。それからあとは、ここにおもむくところで、押せばいいのだらうと、押しながら旅をつづけていった。その最後がマウント・エグモント。雨風にあたれ、ヘソまでぬれて小屋に戻ると、丁度週末だったもので、若いや中年のや十数人の登山者が、登ってきたものの、雨で上へは出られず、小屋で昼めししたところだった。小屋に同行したスキャンラン・老はかつてタラナキ山岳会の会長、N・Z山岳会タラナキ支部長であり、エグモントについて立派な著書があるくらいだから、小屋にいた連中がみんな挨拶している。私はカメラを出してみると、ケースがしつとりとぬれていて、テンプルの上にカメラもケースも、ほろり出しておいだ。

カメラをのぞきこんでいる。きいてみるとアサヒペンタックスなどを持っているのが、日本のカメラの新型が珍らしいのだという。私はS老に、あんなカメラは欲しい人があれば、譲っていい、帰国すれば古ライカがあるといふ。ふいふスーパースピードの持主だから、S老もむかし気質なのだろう。いくらで手放す? 元値は35N・Z弗位だ、四週間はかり使ったから、30ドルにしておく、それはグッド・バーゲルだ。こんなことで値はきまってきたが、欲しい人がいるのか? S老はささきから彼が欲しいといるという。その彼はと前日から私達の世話になっていて、ベア君だったから、私は大賛成、商談成立というわけだ。

ひるめしと、B君のジープで山を下り、ニュー・プリムスのS老宅で着換えもし、夫人にお茶のもてなしを

主計、武山良次氏(編者)、山根雅男氏(川崎精雄)、太田清吉(耳動子)氏(川崎精雄)、稲田豊八氏(佐藤金一)

が、原稿到着が一般に非常に遅れたため、年度末までに刊行するのは、いささかむずかし、五月頃となりましよう。毎号のことながら、御多用中原稿を寄せられた各位に厚く御礼を申し上げます。ただ原稿のなかには、もう少し推敲して戴きたかったものが多く、脱漏や誤謬がかなり散見され、それらを訂正するために、予想外の時間をとられたことも事実です。また本文原稿と共に、追悼、図書紹介のなかにも再三依頼したのに、遂に原稿を戴けなかったものがあり、故人の追悼などはここに残念であつたと思ひます。

私は昭和四十一年夏、職業が変つたのを機会に編集者の辞任を申述べ、そのことを本誌にも明記しましたが、その後のいろいろ曲折があつて、後継者が育つまでは面倒を見て貰いたいと言われ、その点は私にも確かに責任の一半があつたので、後任者として中島寛君に白羽の矢をたて、第六十二年号、第

六十三号と同居を指導しつつ今日に至つた次第です。同居は極めて熱心に、この面倒な仕事を覚えてくれ、第六十三年号の如き、殆んど私の手を借りずに彼が独力でやつた様なもので、大いに成長ぶりを発揮してくれ、第六十四年号からは完全に手がぬけるものと喜んでおりました。ところが、同居は偶々今次のエベレスト南壁登攀に極めて多忙の身となりましたため、その方が一段落するまで、やむなく従来通りの仕事をやらざるを得なくなりました。アシスタントとして倉知敏君が協力してくれてはいます。以上のような次第で、三年ほど前に編集者をやるように申し立てながら、引続き今日に至つた理由を、この機会に一言いたしました。しかし、私としては、依然として多忙な職務を背負つており、かつまた余りにも長くなりましてので、一日も早く後任者に代つてほしい気持ちに変わりありません(二月一日記)(望月達夫)

受け、B君とはカメラの受渡もすんだ。以後私は帰国まで、カメラなしでサバサバした。N・Zはカメラ、時計、テレビ、ラジオ、みんな輸入品で高いという話だ。なるほど私の処分したカメラは、オークランドの店で79ドルの札がついてた。輸入品が高くて、それが買える経済力があれば、別に不自由はないとおもふが、どんなものであろう。

私の馬鹿チョンカメラは、たしかによくとれた。一二五枚の内、一枚失敗しただけ、また出かける機会には、これにしようと思つた。

ニュージーランドを去る

航空会社の事務所には、前に聞いたサイム氏から「エグモント登頂おめでと」と電報が届いていた。こまかい心遣いが印象に残つた。パスの上から手をふつてS老B君と別れた。山組四人はオークランドで、また平地組と合流したが、吉田夫妻はフィジー経由ハワイへ去つたあつた。

ホテルへつくと、いきなり今からヒラリー卿夫妻のお茶に招かれて、衣がえして、ヤブから樺みたいな話である。私がヒラリー卿の著書を翻訳した縁でもあるとか、やさしい山でも同行するとかいうことがあれば別だが、握手をしてお茶をのんで、ハイ左様ならでは、どうも気がすまない。風雨にたたかれてエグモントに登ってきたばかりで、疲れるからと腰を上げなかったが、ほかの五人が往訪談話してきたから、礼を失したことはないまい。

その翌朝、佐藤夫妻は甥御の待つシドニーへ去つた。私達は深田君と「一本松の丘」にあがって、太平洋とタスマン海とに跨がる、美しい港町オークランドを眺めた。点在する十六の火口丘、入りくんだ海、いくつもの森は公園でもあるうか、広々とした町は、

・図書紹介 冠松次郎「山溪記」全五巻、山崎安治「日本登山史」、安川茂雄「近代日本登山史」、川崎精雄「雪山・蔵山」、東大カラコルム遠征隊「キャン・ン・キッシュ」一九六五、深田久弥「ヒマラヤ登攀史第二版」、高木正孝「パタゴニア探検記」D.A. Robertson「George Malloy」、A. Blackshaw「Mountainering」、Joe Brown「The Handycars-an Anthology」、松田雄一編・会務報告・英文梗概

海外登山年表 松田雄一編・イストル・オ・ナール山座同定 田中栄蔵

以上のよう決定し目下組版中です

以上のように決定し目下組版中です

N・Z第一の都会(それでも五十何万の人口)らしい姿であった。丘のふもとにコリンウッド・パークはロンドン郊外を思い出させた。その森の中の小綺麗な家であつた軽い昼食、そこでまた日曜日からしい服装の老夫妻や家族連れが、私の印象にのこつた。

最後の晩はホテルを出て、深田君と三人で「トロイカ」という、チョット洒落た家で、三重奏団の音楽をききながら、美酒をくんで、四週間にわたる旅のたのしかったことを語り合った。そして二月十日、一行五人は佐藤夫妻のあとを追って、この美わしの国N・Zを去つたのである。

酒・タバコ・食事

こんどの一行中、老童四人いずれもアルコールをたしなむ。深田、佐藤の両君などはたしなむ以上かも知れぬ。それは別として、N・Zへついて早速酒屋の店先をのぞいてみた。日本でみたことも、きいたこともないスコッチ・ウイスキーが、ならんでいて、しかもそれが安いのは大喜びだつた。お国で宝物みたいに扱われている、ジョニー・ウォーカー・黒ラベルが、六ドルつまり二千四百円というのだから、大体わかるとおもふ。黒ラベルと同値のもの、まだほかにいろいろある。黒ラベルに眼の色を変えるのは沢庵人種くらいのもにちがひない。四人めいめい異なる銘柄を買って、品定めをするのもたのしかった。

食前酒はシェリーがうまかつたのは、やはり英国系のごほうである。スペイン産は勿論、N・Z産でもよい味である。夕食には先ず一杯の、ドライ・シェリーを欠かさなかつた。これも安い。

ワインはフレンチ、ライン、モーゼル、それに澤州産、N・Z産と、ワイナリストにはズバリと書いてある。なんといいても地元産は安い、N・Z

のワインづくりも相当ふい歴史があるらしいから、決して捨てたものではない。私達はよくコルバンとカバカインという銘柄のスパークリング・ワインを注文した。ワイン通には、なんだといふだろうが、季節が夏だつたし、赤も白もよく冷えて、口に合つた。

N・Zなんて不自由な国だ、時間だの曜日の場所だのに制限があつて、酒が自由にのめないという話をきいたが、われわれは、日ごろ山あるきに携帶するポリタンクがあつたから、いつでもウイスキーをのむに不自由しなかつた。文句をいうのは、旅に慣れない視察団や使節団の連中だろう。

タバコは私がパイプ専門だから、紙巻のことはわからないが、パイプ・タバコは英米本國のもの、それに英國の煙草会社がN・Zの現地工場で作るもの、N・Zの煙草会社のものと、いろいろあつた。英國流の風味だから、特に米國煙草の愛好者でなければ、大抵は口に合う。私はゆく先き先きで、初めては、煙にした。別にイヤな味とか香りとか感じたことはない。

道中の小さな村のバーへ、ビールをのみに入ると、お百姓さんらしいのが、ひるまから屯らしてゐたが、いかついパイプをくわえているのが、うれしかった。

食事については、どこか外国へいってても日本の洋食はどうまいのはいない、という人も少くないが、私はそれほどの食通でも食道楽でもないから、語る資格に欠けている。ただ牛でも羊でも、血からハミ出すほど大きく、もて余し気味だつたこと、バター、牛乳が純粹濃厚だつたこと、野菜も豊富だつたこと、おもなホテルは観光局の直営だから、場所が変つてもメニューの變化に乏しいくらいがあつたことなどをあげておこう。しかし日本料理が恋し

いと、おもつたことは一度もない。その國の風土に合った食事が、いちばんうまいというのが私の持論である。帰國タスマン海を一緒に飛んで、着いたシドニーの空は暗くたれこめて、やがて土砂ぶりの雨、翌日も終日ふつたり止んだり、大谷一良君が、深田君と私達とを、あちこち伴われた。O君から最初にきいたのは、日本でお入れの留守中に、東大とかいう学校が入学試験を中止したことだつた。駅弁大学のもつとぐらひ潰れても、痛くも痒くもない、それが一月間絶縁していた祖國からの、ビッグ・ニュースならば、あまり大した事件もなかつたのだらうとおもつた。

浜辺も公園も植物園も、珍らしい花のさかりで美しかったが、雨を気にしながらの散策で、世界三大美港のひとつ、シドニーらしい風物を、充分に味えなかつたのは、心残りだつた。

東京の場末みだりな香港に一泊して、二月十三日の夜、正確に三十日よりで私達は日本に帰つてきた。過疎の天國から、また過密の地へ戻つたのである。ふりかえつて、ひとつ残念におもふのは、もしN・Zのような國に生れたならば、私はもっと健康にめぐまれ、もっと山登りが達者になつていただろう、ということである。(おわり)

「山日記」への意見

昨年十一月二十日に発売した一九七〇年度の愛読者カードを入れましたが、発売後一ヶ月半経つた時点で、送られて来たカードを整理してみしました。日記としての評価は、一年間使用してみても初めてなされるのが本来なのですが、愛読者カードの性質上、一年後にそれを書いて送ることは、あまりないと考え、とりあえず現時点での評価、感想をまとめてみることにしたわけです。(なお今回の愛読者カードは、読者側で七円切手を貼つてもらう方式のものにしました。)

読者層は別表の通り十五歳から六十五歳にわたり、広く購読使用されていることがわかる。山に關係する団体に所属している人と、無所属の人とは大体半々位であり、あらゆる好きで登っている人々にも多く読まれ使用されていると考えられる。殆んどが長年使用愛用されている方達であり、意見・感想も参考になるものが多い。なかには「毎年間違ひを指摘しているが、訂正する気がないので無駄、日本山岳会とはそんな所か」と思ふと情ない。本気で訂正する気があるなら教える」という六十代の日本山岳会からの端書もあり、編集者の姿勢を追求されたきびしさに、逆にその愛読熱心を見るのが出来る。この方がどういう間違ひを指摘されていたのか問合せ中ですが、われわれ編集委員自身も、誤植、出来、不出来については反省して取り直します。

内容については具体的に言えば、特集の「山と人」「エベレスト」「南極」は、今まではこの種のものには葉に入っていたので、従来の山日記にもう一つ読み物が加わつた形になつたわけですが、この新しい企画は、殆んどの年代の人に喜ばれている。山へ行って沈黙した時の楽しみに、今は読まずにおくという人がいるように、楽しい読物として「山のけもの、鳥、虫」が好評である。

日記欄上の短かい言葉も人気がある。一方、一九五〇年から一九六九年までの山日記の登山關係記事を整理した「登山技術資料」を見て、既刊分を一冊にまとめて欲しいという希望が示す通り、こうした実用面での意味を重視している人もある。

体裁については、表紙にビニールカバーを、ビニール袋を、表紙を軟かく

という希望が多い。これはわれわれも一応考慮したことであつて、濡れるなどの事故には各人がビニール袋に入れていて解決してもらつて、従来のイメージは変えない方がよいと判断したので、厚すぎるから分冊という希望もある。

値段が高すぎるという意見も多い。商業的ニオイがする、マンネリ化が目立つという指摘は、常に編集委員が心してきたことであり、そうならないでという警鐘の意味にとりたて来年度もこれらの意見、希望を充分参考にして立派なものとしたいと考えております。皆様の御指導御鞭撻御協力をお願いいたします。

(山日記編集委員・池戸誠二郎)
山日記読者層表
(一月十日現在の愛読者カードによる。カッコ内は女子)

年齢	本会所属	他山団体	無所属	合計
15	18	3	6	9
19	22	7	6	13
23	29	10	10	23
30	39	1	9	28
40	49	1	6	8
50	59	1	3	5
60	65	4	1	5
合計	95	5	8	108

東海支部マカルー隊出発

東海支部マカルー登山隊(熊沢正夫総指揮、伊藤洋平隊長)一行は二月十四日羽田発、二月二十日カトマンズからピラトナガルに到着した。一行はダイランに二泊したのち、二月二十二日同地を出発、三月十五日ベース・キャンプを設置、登山を開始する。

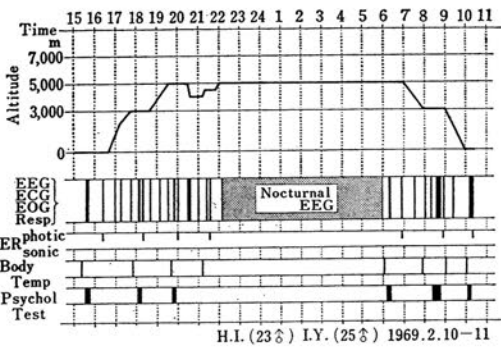
マカールー学術登山隊の高所医学研究

御手洗玄洋

高所順応の経過を、心理とか意識活動の面から検討したものは少なく、またしばしば挙げられるような耐性や作業能についての体験的、感覚的なものと客観的な結果の不一致を、中枢神経系の態度から判断することは、高度順応の詳細にし、その対策を考える上に有利なことと思われるので、今回のマカールー遠征に当り、隊員の高所における「終夜睡眠脳波」の変化から、その順応過程を考察することを主題とした。

① 終夜睡眠とその脳波を遠征理由は①酸素不足によって脳波は敏感にその変化を示し、また心機能や体温等従来の高所順応の研究に多くの人達から観察されたものと、必ず相関を得られると思われること。

(図1)



② 脳波による睡眠型の分析は信頼度が高く睡眠時には、日中活動時のように多くの要因に左右されることがなく、中枢神経系の状態を検討できること。

③ 睡眠は昼夜リズムの一環として、その型は日中の作業能、その他身体的変化を判断する上に有用であること。

④ 登山時には、高所に泊して下山し数日後再び登山すると、すぐれた高所順応を容易に得られることが常に経験されている。以下に昭和四十四年二月先発隊員四名について行なった結果を簡単に紹介する。

方法

実験は図1に示したように二人の隊員を午後二時、直径二m、長さ三mの円筒形低圧室に入れ、約一時間の後低圧を開始、三十分で三千m相当高度とし、そこに一時間過して、さらに約一時間かけて五千m相当高度とし、そのまま翌日の午前六時までの高度で睡眠をとらせ、午前七時上昇時と同じ経過で三千m、十八時間にわたって脳波、心電図、眼電位図、呼吸、光や音に対する脳誘発波、体温等を記録、さらに心理テストを加えた。実験期間は二週間、コントロール二回を含む延六回の実験であった。

(図1は実験経過の一例、上図のタイムは低圧室に入ってから出るまでの時刻を示し、脳波、心電図等は黒線の期間のみ記録している。)

各記録、テストを行なった期間は図中黒線で示しているが、睡眠中の脳波をとっている間は当然光

刺激や心理テスト、または体温測定も止めた。

結果と考察

H.I. (23%) 1969.2.18-19 (control)

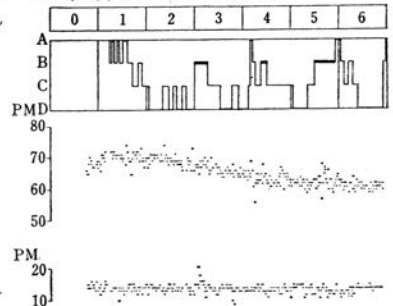


図2に隊員H・Iの例を示したがこれはコントロールとして低圧室中で減圧しないまま睡眠時のみを観察したもので、午前零時より七時までの結果である。時刻は上段枠中に示し、その下のヒストグラムのようなものは、睡眠の深度の変化を現わし、Loonisの分類(一九三七)に従って脳波のパターンを当てはめて得られたものである。

(図2はコントロールの一例、上段枠内の数字は午前零時から六時までの時刻、次は脳波でみた睡眠深度、次は心拍数、最下段は呼吸を示す。いずれも正常である。)

覚醒期(A)、入眠期(B)、軽度睡眠期(C)、中等度(D)、および深度睡眠期(E)としたが、Eはみられなかったもので記載していない。また逆説睡眠は太い線で示してある。

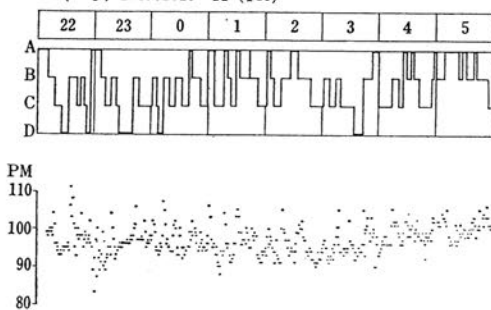
この逆説睡眠は、睡眠中に脳皮質の興奮を高め、生物学的には建設的な睡眠と目されて、健康な眠りに必要な相とされているもので、正常睡眠には必ず存在する。この例でも三回みられ、

これははさんで四回の睡眠サイクルを示している。同時にその下に示された心拍数変化と最下段の呼吸数も正常であった。

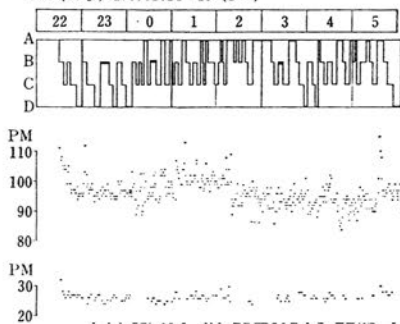
低圧の一回目の実験では図3のようになり、睡眠リズムは高度に乱れ、逆説睡眠はなかった。ところが同一人を一週間後再び低圧室に入れて同じ実験をすると図4のように睡眠リズムは同様に乱れていても、短期間ながら逆説睡眠が三回出現し、初回よりは順応していることがみられた。これらの結果は全例についてその各自の自覚、行動とよく平行しているようであった。また最下段の破線で、高所によくみられているチェインストーク形の呼吸を示した期間を示してあるが、これらは睡眠の形とは相関がないようであった。

(図3)

H.I. (23%) 1969.2.10-11 (1st)



H.I. (23%) 1969.2.14-15 (2nd)



(図3は第一回低圧実験時の終夜睡眠の型、上段は心拍数変化、下の点で毎分の値と示す)

(図4は二回目の低圧実験、睡眠リズムは上段は乱れているが、逆説睡眠太線が僅かながらみられる最下段の破線はチェインストーク形呼吸の期間を示す)

さらに、体温変化を図5の点線で示した。実線は高度変化である。図のごとく、体温は初期には低下するが、五〜六時間後、甚しい場合は三十八度Cまでも上昇するがみられた。低圧下の体温低下はよく知られているが、長時間の暴露ではかえって高くなることは、高所影響を考える上に一つの問題点であろう。一回目と同一人の二回目(上段と下段に示す)を比較すると二回目はこの変化が小さくなっていることが注目される

他の三名についてもほぼ同様の結果を得たことから、高所での終夜睡眠波の観測が、高所順応の検討に新しい方法として期待のもたれることがわかった。

ただ脳波は現地記録が困難なため、遠征時にはできないといった欠点はありますが、図示はしなかったが、体温変化と睡眠の型にはある程度相関がみられ、特に逆説睡眠相と心拍数変化には対応があるので、われわれは今後も引き続き同様な実験を行ない、個々の隊員の終夜睡眠脳波と心拍数、体温変化の相関をききめ、現地では心拍数と体温測定をキャンプ、現地では心拍数に行ない、低圧実験と対応させて初期の目的を果したいと思っている。このために航空宇宙医学などで用いられる超小型心電計、体温測定装置の携行を計画中である。(筆者は名古屋大学、環境医学研究所、航空医学教室)

(図5)は体温と点線IIの低圧による変化、実線は暴露された相当高度を示す。

アフガニスタンの登山及び調査活動に関する留意事項

このたび外務省情報文化局文化事業部長より昭和45年1月9日付情文二合第四六号をもつてアフガニスタン松井大使からの公信(写)の送付がありましたのでお知らせ致します。

記

一、入国査証の取得
当国で上記の活動を行ないたい者は、在京アフガニスタン大使館に申請書を提出し、エントリー・ビザを取得しなければならぬ。(当国への入国査証はEntry, Tourist, Transitの三種あり。Tourist Visaは登山はできなく、Entry Visaの発行は本國政府経同事項であり、一二月カ月時間がかかる。

二、入国後の手続

(1) 査証関係

Entry Visaにより入国した者は、48時間以内に警察(当地でポリースという)に届出るとともに滞在査証を更めて申請する。滞在査証は警察が発行するが、その取得には当館が口上書をもつて外務省(文化局)に発行方を要請する必要がある。申請者は右口上書をもつて文化局に出頭し、文化局の文書をもらい警察に行かなければならぬ。なお当国を出国する時は、Exit Visaを上記の手続を繰返し警察から取得する必要がある。

(2) 旅行許可(または登山許可)

登山或いは地方調査旅行をする際は旅行を作成し、内務省の許可を受けなければならぬ。右許可取得は(1)の手続に準ずる。

(3) 無税通関

現在のところ登山旅行関係の装備・食料品等は無税通関が認められている。(無税通関したものは、帰国時に再び持出す必要があり当国内での処分は許されない) 税通関申請にはバックギン・リスト三通が必要であり、当館口上書による要請を外務省文化局が確認し、大蔵省の許可を取付け税関に許可証を提出する。

バックギン・リストは各バック・ゲージ別にリストを作成し価格を記し、六通程度用意することが望ましい。

(4) 自動車の持込

自動車の持込者は、当国は従来一九四九年九月十九日付Convention on International Road Trafficの当事国ではなかったが、一九六九年公式に当事国となった趣意であるので、右条約に基づき

手続を踏む必要がある。なお自動車の持込者は国境税関において、通例旅券にその旨記載を受け、出国の際は持込んだ自動車とともに出国することを要す。

三、一般的な留意事項

(1) 登山隊、調査隊は医師を同行し、充分な薬品を持つ必要がある。来訪者の多数は激しい下痢になるので、脱水症状に対する処置等をこころずる必要がある。

(2) 食料品を携行するのが得策であり、現地調達には困難である。

(3) 当地は外国為替の管理は事実上ない。通貨の交換は自由である。アフガニスタンを購入する際は銀行、パザールとも率はほぼ同じである。

(4) ガイド等を斡旋する組織的な機関はない(観光ガイドは、ツーリスト・オーガニゼーションで斡旋してくれるが非常に高価である)。

(5) 自動車、トラックの借上げの際

は、その安全性を自から確認出来る程度のメカニック知識が必要である。(以上)

成田安輝の消息わかる

松方さんが週刊新潮の掲示板欄に河口慧海と前後して明治三十四年チベット首都ラサリを去った日本人の消息をたずねる投書をしたら、早速返事がきてその存在が明らかになったという珍らしい話がある。とりあえずその記事を読まねばならぬ。

松方三郎 河口慧海師が初めてチベットにはいったのは明治三十三年、ネパールからダウラギリの北で国境を越え、マナローワールを回ってラサリを去ったのが翌三十四年の三月でした。その七月にはダライ・ラマに謁見しています。ところでこれと前後してラサリ

にはいったもう一人の日本人がいたという話がありますが、なにぶん資料不足で真偽のほどがわかりません。成田安輝なる人物で、「明治三十四年冬遊其地、參觀此宮殿、面謁与当地之宰相總堪布」の一文を残しており、「此宮殿」がボタラ宮というの明らかですが、それにしても同じ時にラサリにいらした河口さんにはぶつからなかったが不思議です。この成田氏について、どなたか手がかりを下さいませんか。

(二月十四日号)

松方三郎様へー成田安輝は私の父で、大正四年七月七日に奉天満鉄病院において病没しております。チベットへは早くより入国の志をいだき、揚子江を溯り、この方面より入蔵したすべく重慶において私塾を開き、支那人子弟の教育に従事しつつ機会をねらって打箭炉まで行きましたが、とういてこのルートより入国することは警戒厳重のため困難なことが判明しましたので、道を変えて上海、廣東、シンガポール、ボンベイよりネパールに赴き、さらに亞東関より明治三十四年十一月十二日拉薩に赴き、翌春同じルートを通して横浜に上陸しております。この旅行は日本人としてではなく駐蔵大臣(清國)の弟として支那人名義で入蔵しましたため、あまり世間に知られずじまいでした。すでに研究しておられる河口慧海師より半年ほど遅れて拉薩にはいったことになりました。

紀行文ならびに写真の断片的なものには私の手元にありますから、御希望ならばご覧に入れます。(二月十八日号 東京杉並区成田安輝)

松方氏よりうかがったところによると、この欄の担当者へ何か書くよう無理に頼まれ投書の形で書かれたとのこと。「明治三十四年冬云々」の説明文は亡父の遺品のボタラ宮の絵の写真に書かれていたとのこと。(山崎)

エベレスト登山
募金状況報告

二月七日現在

会員募金 二、五六一、二二七円
 一般募金 三、七七八、六〇〇円
 募金委員会事務局

氏名

会員番号

募金口数

あ行	安彦 六郎	三五〇一	三
足立源一郎	一五二四	二	二
青木 巖	三七七八	二	二
青木 昇	一七二二	一〇	二
青山 亘	五四七四	四	一〇
赤瀬 曉	六一二六	一	二
浅井 修二	六三三三	二	三
浅利 欣吉	五三三九	一	一
荒尾 宏	四四六六	一	一
荒巻 広政	一五五六	五	一
新谷栄三郎	六一九三	一	一
安藤 文子	五七六五	一	一
安藤 昌宜	六六三〇	一	一
淡川 舜平	六六四二	一	一
井上 綱	一八八〇	五	一
井口 正男	四一四〇	二	二
井出 賢三	六三九五	二	二
伊集院虎一	三九〇二	一〇	二
伊藤 久行	一八五五	一〇	二
飯野 亨	四四六七	一〇	二
五十嵐高志	五三六一	一〇	二
池田 進	三五一〇	二	二
石井 久夫	五一一〇	二	二
石川三知子	六〇五四	二	二
石原 憲治	一八六五	五	二
石間 信夫	四六六六	二	二
泉 亮	六三二三	二	二
市川 章弘	五七七九	二	二
稲垣 一郎	三七〇四	二	二
大飼 哲夫	一一七七	一〇	二

今井 嘉道	一〇六九	三〇	二〇
今川 良雄	一五五三	二〇	二〇
今木 彦彦	六二四三	二〇	二〇
今西 寿雄	一六四九	二〇	二〇
岩崎 三郎	六二六二	二〇	二〇
岩崎 英宣	六四四九	二〇	二〇
岩田 新治	二一六七	一〇	一〇
岩永 信雄	六二八	一〇	一〇
岩永 安雄	四八七〇	一〇	一〇
岩間むつみ	三九〇五	一〇	一〇
井原 蓉子	六三八四	一〇	一〇
井野 暢夫	六五七三	一〇	一〇
井上 豊重	六六三五	一〇	一〇
井上 一男	六五八一	一〇	一〇
市川 正	六六六一	一〇	一〇
今泉 均	六八二六	一〇	一〇
魚本 定良	五九九七	一〇	一〇
宇田川久太郎	一四一八	一〇	一〇
磯井 橋次	五七六〇	一〇	一〇
内山 健次	四一三五	一〇	一〇
鶴木 洋	五七三〇	一〇	一〇
上野 英世	六五七一	一〇	一〇
宇佐美恭義	三五〇八	一〇	一〇
エーデルワ	四四三六	一〇	一〇
イス・クラフ	一六八三	一〇	一〇
榎本 豊松	三九〇八	一〇	一〇
小倉 董子	四二四〇	一〇	一〇
小倉 茂輝	四八五二	一〇	一〇
小椋 凱夫	六三九八	一〇	一〇
小田 哲夫	三三六二	一〇	一〇
小田和友蔵	五七〇四	一〇	一〇
小野 健	六四三三	一〇	一〇
小野 芳橘	一三三四	一〇	一〇
小原 勝郎	一五五五	一〇	一〇
大島 堅造	五六六九	一〇	一〇
大田 邦介	五二二二	一〇	一〇
大谷 優	一五〇〇	一〇	一〇
大野 俊夫	一三八二	一〇	一〇
大間知邦太郎	五六一	一〇	一〇
大山 孝一	四一七〇	一〇	一〇
尾崎 徳郎	三	一〇	一〇

織田 収	三九一九	二〇	二〇
織内 信彦	一八四六	二〇	二〇
岡本 徳之助	二七	二〇	二〇
岡部みち子	五〇〇三	二〇	二〇
岡本 如矢	四七一六	二〇	二〇
岡本 竜行	五五一五	二〇	二〇
岡本 清一	六〇二七	二〇	二〇
萩野 恭一	五四六六	二〇	二〇
落合 永子	五三三四	二〇	二〇
奥川 雪江	四七五六	二〇	二〇
奥津 正彦	五五五六	二〇	二〇
奥野 正太郎	一八一八	二〇	二〇
奥山 章	六四五一	二〇	二〇
長田 義則	五四六五	二〇	二〇
小栗 宏	六二二三	二〇	二〇
小賀 誠一	六五二七	二〇	二〇
太田 五雄	六四八六	二〇	二〇
恩田 善雄	六六〇六	二〇	二〇
岡本 英治	六七〇九	二〇	二〇
太田 義一	六七五六	二〇	二〇
大谷 洋生	六七五八	二〇	二〇
小花 朋子	六八一九	二〇	二〇
か行			
可知 邦成	二二〇六	二〇	二〇
加治 甚吾	一五九三	二〇	二〇
加藤 泰安	一一五七	二〇	二〇
加藤 幸彦	五一八一	二〇	二〇
加藤 博二	六二〇〇	二〇	二〇
学習院山岳部	一一三二	二〇	二〇
笠原潤二郎	一〇三八	二〇	二〇
片山 欣弥	四二五七	二〇	二〇
神谷 恭	七四四〇	二〇	二〇
神谷 真吾	三三七六	二〇	二〇
神原 達	四三六六	二〇	二〇
神木 昇	五一〇三	二〇	二〇
亀井 公	五九四一	二〇	二〇
亀田与三三	二四四八	二〇	二〇
亀谷外毅雄	三九九〇	二〇	二〇
河田 徳次	六三一五	二〇	二〇
川喜田壮太郎	一三六九	二〇	二〇

川口 俊幸	五三二九	二〇	二〇
川越 孝次	二九九九	二〇	二〇
川端 巖	五五二二	二〇	二〇
川端 信治	五三二五	二〇	二〇
川森左智子	三〇〇七	二〇	二〇
川村 博通	四〇一一	二〇	二〇
冠 松次郎	二二七	二〇	二〇
梯 安夫	四八五四	二〇	二〇
河西 俊郎	六五四五	二〇	二〇
金子 昭二	六五一	二〇	二〇
加久保一明	六五九七	二〇	二〇
鍵和田洋一	六五九七	二〇	二〇
加藤 恭子	六六三六	二〇	二〇
加納 巖	六七二七	二〇	二〇
笠原 正明	六八七	二〇	二〇
木下 是雄	二五六三	二〇	二〇
木原 均	一六九八	二〇	二〇
木村 武男	三五四二	二〇	二〇
木村友三郎	四八〇二	二〇	二〇
木本 善重	四八四八	二〇	二〇
岸 栄	六五〇六	二〇	二〇
木村 操一	六四六二	二〇	二〇
久保田保雄	六二七〇	二〇	二〇
熊谷太三郎	五五一九	二〇	二〇
黒石 恒	五七七五	二〇	二〇
桑原弥寿三	五七〇六	二〇	二〇
熊切 芳昭	六七三	二〇	二〇
小崎 司郎	五三二二	二〇	二〇
小島 栄	四四〇	二〇	二〇
小島隼太郎	三四五二	二〇	二〇
小須田喜夫	三五九三	二〇	二〇
小滝清次郎	二五六一	二〇	二〇
小林 義正	一三七八	二〇	二〇
小林 猛雄	六一〇七	二〇	二〇
山林 正雄	六〇一七	二〇	二〇
小松 勇	三九四八	二〇	二〇
小森恵子	四七六二	二〇	二〇
後藤 幹次	一〇二四	二〇	二〇
後藤 三郎	三二七〇	二〇	二〇
河野 幾雄	四六〇一	二〇	二〇
近藤 恒雄	一一九四	二〇	二〇

近藤 等	二二二七	二〇	二〇
権藤 太郎	二〇三七	二〇	二〇
近藤 彬	六七四二	二〇	二〇
近藤 保人	六七六二	二〇	二〇
斎藤 兵三郎	三二一	二〇	二〇
斎藤 桂	五九一一	二〇	二〇
斎藤 哲郎	六一八四	二〇	二〇
斎藤 敏男	六四五二	二〇	二〇
三枝 守博	三五	二〇	二〇
三枝 礼子	四二八五	二〇	二〇
坂井 厚	五〇三二	二〇	二〇
坂倉登喜子	三〇四一	二〇	二〇
坂本 真生	三九九八	二〇	二〇
酒井 俊雄	二二五五	二〇	二〇
酒井 敏明	四四五六	二〇	二〇
境野 俊男	四四九〇	二〇	二〇
桜井 俊雄	一〇五	二〇	二〇
佐々木健太郎	五二一	二〇	二〇
佐々木賢治	一四一六	二〇	二〇
佐藤隆太郎	七五一	二〇	二〇
佐藤 テル	一六四一	二〇	二〇
佐藤 佳年	四〇四九	二〇	二〇
沢村 幸蔵	五九三八	二〇	二〇
佐藤 節子	六四五六	二〇	二〇
佐藤 芳男	六五九三	二〇	二〇
作見 徹	六五九三	二〇	二〇
三枝 明徳	六五九三	二〇	二〇
佐藤 七郎	六五九三	二〇	二〇
篠崎 博	五八九六	二〇	二〇
塩田 良仲	三二四八	二〇	二〇
島田 巽	一一二七	二〇	二〇
城山 正三	一五〇九	二〇	二〇
新保 信雄	二八三二	二〇	二〇
新堀 春喜	二二七四	二〇	二〇
柴田 均二	二六五五	二〇	二〇
新貝 勲	六〇七二	二〇	二〇
柴田蔵太郎	六四九四	二〇	二〇
篠原 千秋	六六三七	二〇	二〇
須田 紀子	五三九〇	二〇	二〇
菅谷 保夫	六一二九	二〇	二〇

氏名	会員番号	募金口数
杉浦 耀子	五〇〇五	三・六
杉田 博	六一六九	三
杉野 目	四一三	二
杉山 孝	三九四〇	五
杉山 泰司	六一二八	二
鈴木 岐侑	三四一	一
鈴木 和信	五五五七	五
鈴木 昭	五五六一	三
鈴木 敏雄	五七七一	二
菅原 篤則	六六六八	二
瀬名 貞利	一七七二	一
瀬戸 正昭	四八〇八	一
関根 吉郎	一四六九	二〇
関本 一男	五〇一	三
瀬川 勲	六六一六	一
関野 重政	六六四四	一
曾山志計雄	四六二〇	一
園田 光一	六二〇二	一
た 行		一
だけ 山の会	五八四二	五
多田 隆峰	五九一六	一
田 鏑 寿	五九四〇	二
田中 正智	四七一八	二
田中 善一	四九一四	二
田中 重輔	六一五	二
田辺 多聞	一四三九	二
田辺 主計	六三六四	二
田辺 恵造	四四四二	五
高尾 徳繁	五三〇八	一
高岡 周夫	五五六七	三
高沢 光雄	四六九八	一
高田 俊雄	四九五〇	二
高田 誠	五四〇四	二
高田 允克	五五三二	二
高遠 宏	五五三二	一
高野 喜七	三二二一	一
高橋 長助	五八四一	一
高本 孝	四四五三	一
滝浪 善一	五八二二	一
竹島 正義	四四四八	一
竹田 寛次	四四九六	二
竹節 作太	一六九六	二〇
武田 益太郎	四七五九	一
武田 育子	五五六六	一
武田 満子	六〇四三	一
辰沼 広吉	一九五三	五
谷 博	一四八四	一〇
谷 久光	五五六一	一〇
丹波 洋	四八六五	二
滝口 操	五五七九	一
滝口 修	五五七八	一
高沢 忠	六四八七	一
田中 潤一	六五三二	五
大力 博	六四五五	二
千葉 重美	五三八三	二
茶谷 東海	五一五二	五
千谷 壮之助	二七六九	二〇
宅間 清子	六五五三	一
谷野 彪	六六四一	一
高橋 義勝	四九九二	一
塚越 茂樹	四八二二	一
塚田 和男	六二一一	一
都筑 竜	五九三四	二
辻 莊一	四八七	五
堤 基五郎	四一六二	一
鶴見 敏彦	六三七一	二
津金邦太郎	六五四八	〇・五
寺崎 吉彦	六〇九一	一
寺村 栄一	二〇四一	一
出口 一良	六七〇〇	一
徳永 芳雄	四三三三	五
富田 記一	二五〇四	一
富田 美知子	四九八三	二
常盤 一雄	二四二三	二
東京印書館	五九八〇	一
東京山岳部	三九二一	二〇
東京山岳部	六〇五五	二
登 高 会	一六三八	五〇
島山 梯成	七三	一〇
外山 定男	六四〇二	一〇
豊田 春満	一五七一	一〇
島居 亮	一九三四	一
遠山誠之介	六八一五	一
な 行		一
永井 俊三	一四五三	一
永谷 義三	二〇一三	一
内藤 正広	五五五一	一
中西 豊和	六〇五七	一
中尾 正武	二五二五	一〇
中尾 健児	五九一二	一
中野 征紀	一三〇一	三〇
中野 峻陽	二八二〇	二
中野 愛三	四六九三	二
中野 明	二四七八	二
中野 愛三	八五七	二
中島 正文	五〇八七	〇・五
中村 宏	四三五一	一
中村 一雄	四四四二	一
中村 純二	四四四一	一
中村 武久	六四五三	一
中沢 真二	六二二三	一
中川 武	五五七九	二〇
中川 泰助	六三九七	二
中河 与一	四四〇〇	一〇
中原繁之助	二六七	三
中原万次郎	三三三三	二
中山 俊夫	六三九六	二
中橋 右近	二〇七六	二
名児耶達男	六〇七五	一
名須川 浩	一三八九	一
行方 沼東	四八五八	一
奈良隆之助	六三三〇	一
成沢 清	八六五	一〇
成瀬 岩雄	六四六七	二
中村 隆哉	六四七四	一
中村 賢二	六六七一	一
中村 進	六六四三	一
西 諒	五九〇五	一
西沢 健一	四四二七	二
西方 芳太郎	五五二〇	一
西田 哲弥	六六七九	二
額田 敏	九七六	一
沼倉寛二郎	二一八五	二〇
沼田鉄治郎	三四二一	一
練木 允雄	五二九九	一〇
野上 成勇	五八五六	一〇
野上 末延	八〇六	一〇
野口 秋人	四五一九	二
野口 晃	五二六五	一
野々上 幸	六七三六	一
は 行		一
浜口 巖根	一二〇八	三〇
浜野 正男	一七三三	三〇
浜野 吉生	五八一五	二〇
原 始	四四四七	二
原 幹	三九四六	二
橋本 正	四四四七	三
橋本 広	五五九七	三
橋本 善哉	二一〇二	二
島中 左衛門	五八四〇	一
蓮田 清	四八二八	一
早川 種三	九二一	一
早川 義郎	一五〇七	一〇
早川 研一	五五五一	一
林 哲也	六四〇〇	二
林 清	六四一八	一
馬場 猛	四九四三	一
羽賀 一蔵	五〇二〇	一
花井 馨	二二六四	一
萩 千夏子	六三八七	一
橋本 正明	六七一三	一
平柳 一郎	四六〇四	一
姫野 和記	五九〇三	一
日高信六郎	一四二	五
日比野 進	六〇〇四	一
広瀬 貞雄	五四〇八	一
広瀬 誠	五五七五	一
広谷 精啓	五二五四	一
広沢 伝一	六三二四	一
広羽 清	三一五七	二
広江 研	六四一六	一〇
深田 久弥	一五八六	三〇
深瀬 一男	四九七三	一〇
深井 英司	六三二六	一
福田 文二	四二二八	二
府川 裕	三三八二	二
藤川 九三	八九三	二〇
藤島 敏男	七一一	一〇
藤井 運平	二五四一	一〇
藤本 昇	五〇四〇	一
船越 元照	六五三〇	二
藤沼 一徳	六六〇四	二
福島 泰夫	六六一二	二
藤井 信一郎	六六二四	二
細川沙多子	五〇〇四	二
星野 重	四二二六	一〇
堀内 章雄	四四八三	二
本多 紀元	一一二四	一〇
本多 関雄	五九四三	一
本間 宏之	五五五七	一
榎 有恒	三四一	三〇
前田 浩	四三三三	一
前田 宗寿	四六六〇	五
牧野 衛	三一九四	一〇
牧野 文子	四一七六	一
増田 甲子七	四四四三	一
増本 茂	一四〇五	二〇
町井 覚	五五六一	一
町田 立穂	三三〇三	一〇
町田 一碧	三三三三	一
町田 周夫	二五八六	一
松江 喜盛	二五八六	一
松方 三郎	五四七	五〇
松島 静吾	六一九二	一
松永 晴利	三七一六	二
松永 敏郎	四九三三	二
松本 敏次郎	三五一	二〇
松本 清	五三三	一
黛 治也	四二七〇	二

氏名	会員番号	募金口数
丸茂キクエ	六〇六四	一
樹田 信弥	六四八九	一
松村 泰良	六八〇七	一
榎浦 航	六八三三	一
三浦多美子	六八五〇	一
三重野勝彦	六〇三二	一
三野 淳男	六一二二	一
三井 本寿	五四二八	一
三島 昌夫	六一一五	一
三田 幸夫	九二四	一
三谷 孝一	四〇九二	一
水越 誠一	一一〇	一
水野 公男	五五三四	一
皆川 孝平	五三三八	一
宮井 英明	二二三三	一
宮川 初男	五六五四	一
宮崎 善人	六四一七	一
宮崎 辰雄	六三三一	一
宮崎岩松会	六〇〇八	一
宮下 啓三	五五四六	一
宮下 秀樹	五五五〇	一
宮森 常雄	五七二三	一
宮本 貴文	四七五三	一
港 叶	二四五八	一
三浦 巖	六六〇〇	一
村井 栄一	一三三五	一
村岡 純	三四二四	一
村尾 金二	一四三三	一
村田数之亮	一五四五	一
村岡 利夫	四八九五	一
村山 金吾	三九九六	一
武藤 晃	四七五一	一
明治大学	一一八〇	一
山岳部	一七三九	一
望月 達夫	一七三三	一
森 敷夫	六〇三三	一
森川 洋佑	六二八八	一
諸岡 一	一八六四	一
森 宏子	六五三四	一

守田 治夫	六七九二	一
森山 重禧	六八三一	一
や 行	六〇〇〇	一
八巻 実	五三六九	一
矢田城太郎	二四五	一
矢野 真	五三九二	一
矢野 鉄雄	一九六九	一
安江 多市	一〇四一	一
山田 二郎	三四七三	一
山田美都枝	四九二六	一
山田 圭一	五五八〇	一
山口 季次郎	四一三	一
山口 健児	一一七一	一
山口 滋嗣	三六四〇	一
山口 節子	四四七五	一
山本 朋三郎	三三三三	一
山本 光二	四二二三	一
山本 良三	五七六八	一
山下 久男	四八一六	一
山井 基福	九四〇	一
山里 寿男	六八八六	一
山川 国雄	六二九四	一
山岡 健志	六六〇八	一
山本 卓雄	六六三九	一
山田 亮三	六七一九	一
湯浅 充泰	二二八二	一
湯浅 道男	六二一四	一
湯浅 俊行	六五八〇	一
湯本 三郎	六二九〇	一
吉村 俊一	六二九〇	一
吉田久兵衛	八二六	一
吉武 正子	四八〇六	一
吉阪 隆正	一六九一	一
わ 行	一七一五	一
和田 一男	三七二	一
若林祐治郎	四二七九	一
鷺尾彦七郎	一一五〇	一
早大山岳部	一一九一	一
渡辺 公平	一〇〇	一

会社名・氏名	募金口数
渡辺 利雄	一三〇三
渡辺 嘉男	二四七六
渡辺 洋子	五七六四
渡辺 博厚	六六九二
支部関係	一八・三
越後支部	一
一般募金	一
法人	一
(株)今西組	一〇〇〇
(株)クレッセント	一〇〇〇
住友金属工業(株)	三三〇
住友化学工業(株)	二〇〇
住友電気工業(株)	一〇〇
住友商事(株)	一〇〇
日本板硝子(株)	一〇〇
住友信託銀行	一〇〇
日本電気(株)	一〇〇
住友生命保険	五〇
住友海上火災保険	五〇
住友セメント(株)	五〇
住友金属鉱山(株)	五〇
住友重機械工業(株)	五〇
住友不動産(株)	二〇
東亜燃料工業(株)	一〇
日本団体生命保険	一〇
不二音楽(株)	一〇
成美堂出版(株)	三
個人	一〇〇〇
赤井 三郎	一〇〇〇
池田 計政	一〇〇
岩崎 教子	一〇〇
H.N. Banetie	一〇〇
小串 庸夫	一〇〇
小野寺 幸之進	一〇〇
強羅環翠楼	一〇〇
鈴木 六	一〇〇
佐藤 隆一	一〇〇
林 節治	一〇〇
和田 節治	一〇〇

会務報告

二月理事評議員会

(5日7時、本会ルーム)

出席者吉沢、深田副会長、辰沼、山崎、野上、原、牧野内、大塚、中島、小倉、松田、藤田、川上、長尾各理事、津田、金坂、沼倉、石原各評議員。

議事

来年度役員の内

二月中に常務理事会を開き検討する

エベレスト登山の件

二月八日住吉、松浦、平林、長田の中発隊が出発。先発隊と協力し三十トンの船積み荷をカトマンズまで運んでいる。ベリス・キャンプにはいるのは三月二十日の予定。

指定寄付の件

指定寄付の許可は二月四日の官報に公示され、一月二十一日にさかのぼり七月三十一日まで、となった。会員の募金は一月三十一日現在で約二百六十万円となり、目標の三百二十万円にあとひと息となった。

エベレスト隊献送会の件(川上)

二十日毎日、NHK、本会の共催でホテル・ニューオータニで開催する

報告

山岳図書語る夕べ

二月二十六日ルームで開催する。深田、小林、山崎三氏に話してもらう。

スキー懇親会の件

三月二十八、二十九日蔵王でやる予定で計画を進めている。

山岳の件

山岳六十四年は初校が出はじめたが原稿の遅かったものもあり、発行は五月ごろになる。

海外連絡

(松田)

ネパール皇太子成婚式に神原夫妻と西堀三郎氏が出席するので、金文字入りの門田のビッケルをお祝いとして献上することにした。

万博にヒラリー卿が来日するので七月二十三日から本会で招待し、七月二十三日エベレスト隊員との交歓、七月二十四日から一週間北アルプス山行七月三十一日西武百貨店で開催予定のエベレスト展のオープニング・セレモニーに出席してもらう。

万博ネパール館のカラ・コルトンは二階、バルコニー壁面に飾ることとし百三十二万五千円(エベレスト勸定)で目下進行している。

田村俊介氏からソ連における日本エベレスト隊のニュースを送付してきた

・山日記の件

なお北大OB林和夫、木村両氏が特別出席し、北大ヒマラヤ隊のハシシユ(大塚)密輸事件について説明と陳謝があり、北大で目下計画しているマルピチンは一応中止、ダウラギリ第五峰は遠征するかどうか検討中であると説明があった。

図書室便り

(昭45・1)

新刊図書受入報告

前芝茂氏寄贈

(1)同志社大学山岳会アンデス・アマゾン登山探検隊著『ワイルカバンパ山群とワイルカバンパ河一八九六五』

昭・44

実業之日本社寄贈

(1)本多勝一著『きたぐにの動物たち』

昭・44

誠文堂新光社寄贈

(1)小林義雄著『極地―その自然と植物―』

昭・44

広羽清氏寄贈

(1)毎日新聞社編『世界の山岳・ヒマラヤ』

ヤ篇—毎日グラフ増刊—昭・44・

(2) 毎日新聞社編『世界の山岳・フルブス篇—毎日グラフ増刊—』昭・44・

(3) 毎日新聞社編『富士山—毎日グラフ別冊—』昭45・

定期刊行物受入報告

(部報・金報類)

(1) 山村民俗会『あしなみ』No. 118, 119 (44-11, 12)

(2) 兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 32 (45-1)

(3) 国立公園協会『国立公園』No. 242 (1970-1)

(4) 京都山岳会『京都山岳』No. 536 (1970-1)

(5) 東京野歩路会『山嶺』No. 476, 477 (44-12, 45-1)

(6) 駒沢大学山岳部『山色溪声』No. 4 (1969)

(7) 低山を歩く会『低山』No. 52, 53, 54 (1969-10, 11, 12)

(8) 神戸大学山岳会『山と人—神戸大学エーモン学術登山隊報告書—』No. 70 (44-12)

(9) 日本登山協会『山と雪』No. 141 (45-1)

【雑誌】

(1) 『登山』No. 143 (1470-1)

(2) 『登山』No. 28 (44-12)

(3) 『登山』No. 272 (1970-2)

(4) 『HIKER』No. 172 (1970-2)

(5) 『登山』No. 377 (1970-2)

【その他】

(1) 『登山会名簿 昭和44年度版』

洋書受入報告

岩淵泰郎氏寄贈

1. Maurice Herzog "La Montagne" Paris, Larousse, 1956.

Mr. Mario Fanin 寄贈

1. Mario Fanin "Montagne di

Groenladia" Bologna, Tamari Editori, 1969.

2. Mario Fanin "Sui Ghiacciai dell'Africa" Bologna, Cappelli Editori, 1968.

【その他】

1. "Panorama of Slovakia" (1969-7)

Journals Arrived in January

1. "Akademischer Alpenklub Bericht. Jahresbericht" 64, 1. Nov. 68-31. Okt. 69.

2. "Die Alpen" 45, Quartal 4. 1969.

3. "Die Aplen" Jahrgang 45, Dezember 1969.

4. "Alpinismus" Jahrgang 7, 12. Dezember 1969.

5. "Apparacha. Bulletin" Vol. 35, No. 11 & 12. November, December, 1968.

6. "Der Bergsteiger" Jahrgang 36, Heft 12. Dezember 1969.

7. "Deutschen Alpenvereins. Jahrbuch" Vol. 93, 1969.

8. "Deutscher Alpenverein." Mitteilungen" Jahrgang 21, Heft 6. November 1969.

9. "The Geographical Journal" Vol. 135, Part 3. September 1969.

10. "Mountain" No. 6, November 1969.

11. "Osterreichischen Alpenvereins. Mitteilungen" Jahrgang 24, Heft 11/12. Nov./Dez. 1969.

12. "Rivista mensile" Anno 90, N. 10. Ottobre 1969.

13. "U.I.A.A. Bulletin" No. 37, December 1969.

14. "Verkehrsbuch" Ausgabe 40, Winter 1969/70.

15. "The Youshire Ramblers

Club Journal" Vol. 10, No. 34, 1968.

図書委員会報告

一月二十二日 午後七時より図書室

山崎、野上、川上

(1) 本展の反省

目録の訂正表をいくり会報に掲載する。

特殊なテーマの場合は委員会のみでなく会の行事として助力がほしい。

(2) 山岳図書を語る夕べの計画

二月二十六日午後六時半。本会会議室。座談会の要点は会報掲載。

(d. s. n. o. 8)

つい先日まで、東京の空気はカラカラ。突然嵐がやってきたと思ったらまた異常乾燥注意報。まったくお天気とはよく言ったものです。昨日はそれのおかげかどうか、富士をおおいかすようにして真紅な西陽が落ちるのを見ました。

(東)

ルーム日誌 (45年1月)

8日(木) 定例理事評議員会

9日(金) 北大山の会

16日(金) 日ネ協会ネパール語講習会

20日(火) 日ネ協会ネパール語講習会

22日(木) 指導研究委員会

23日(金) 日ネ協会ネパール語講習会

28日(水) 常務理事会

29日(木) エベレスト募金委員会

30日(金) 北海道スキー打合会

31日(土) 日ネ協会理事會

一月中来室者三三七名

スキー懇親会のお知らせ

第二五八回小集会

集会委員会と婦人懇談会では次の要領によりスキー懇親会を開催します。ご家族おさといあわせのうえふるって御参加下さい。

△期間 三月二十八、九両日

△場所 蔵王山の家

△参加費 二千元(交通費は除く)

(二十名で締切ります)

△参加希望者は三月二十二日まで本会ルームに申し込むこと。

J・フランコ氏との交歓会

フランス国立スキー学校々長で、マカール隊の隊長をつとめたジャン・フランコ氏は、日本、フランス・スキー・スクール特別講習会に指導のため、ルネ・ボゾン、ベルナル・ペレ、面教授とともに一月二十四日、苗場赤倉、志賀、熊ノ湯などで一般スキーヤーを対象にスキー講習会を開催したが二月七日午後六時半から本会ルーム

でフランコ氏一行との交歓会が開かれた。近藤等氏から三人の紹介があり、三田会長から歓迎の言葉が述べられたあと、フランコ氏は、フランス・スキ一連盟、フランス山岳会を代表して、エベレストとマカルーの日本隊の成功を心から祈るむねあいさつがあった。続いてフランコ氏が持参したフランス隊のジャヌー登頂の記録映画が上映され、感銘を与えた。本会から三氏にネクタイと記念品が贈られ、終ってエベレスト隊員と話ははずんだ。

なおフランコ氏は同夜帰国された。外国山岳バッジの寄贈 プラハで開催されたUIAAの年次総会に出席した海外連絡委員の田村俊介氏より、UIAA出席の際入手した資料、チェコスロバキアの地図、チェコスロバキア・リスト連盟ベナントと共に次の二つのバッジが送付されました。本会では早速外国山岳会のバッジの額にいられて保存することにしたのでお知らせします。

一、チェコスロバキア山岳協会
二、ブルガリア山岳協会

谷川岳登山身分証明書の発行

谷川岳登山身分証明書は毎年三月一日から新しい証明書を使用することになってしたが、本年度は準備の都合で新証明書は四月一日からとし、三月末までは四十四年度証明書に都岳連選対委員会の検印あるものに限り有効とすることになった。

三月中谷川岳の登山規制地域に入山される方は都岳連事務局まで四十四年度証明書を持参し検印のうえ入山されたい。新証明書の発行については追ってお知らせする。

なお本会事務局で右の事務手続を行なうが、必要な方はなるべく早く御連絡下さい。

第一次、第二次工峰偵察隊報告書

ガストンの山岳書店 店主・L.C.ボーム(英国山岳会員)

登山、極地に関する各国の新刊、旧刊、絶版ものの取次ぎ販売。各国山岳会年報、月報、登山案内書、特殊地図、版画なども取扱っております。型録その他のご照会、お申込みをお待ちしております。

宛名 "GASTON'S ALPINE BOOKS"
134 Kenton Road, Harrow Middlesex,
HA3. 8AL. England
(なお、JAC, AC, AAC, ACCの会員、Mr. Ichiro Yoshizawaは、私の親しい友人です。)

A5版、四三〇ページの詳細な報告書が出来た。頒価二千元。送料百円。二百部限定。残部若干あり。希望者は至急本会エベレスト事務局まで。

後書 某誌の依頼で北アの山全部の故事来歴を調べる羽目となり、江戸時代の地誌などと言つてびきでひと苦勞した。山名の由来など多くの未知の分野が残されていることを痛感。(山崎)

昭和四十五年三月十日発行

東京都千代田区神田錦町
三二二 向井ビル
社団法人 日本山岳会
編集代表 山崎 安治

(233) 七四四一
振替口座東京四八二九番

印刷所 東京都港区赤坂一丁目三番六号
株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金600円也
送料 別受け 金120円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道2~15、電話(943)0311(代表)
大阪店・都島区相生町7、電話(352)3491(代表)
名古屋店・昭和区雪見町1~15、電話(731)7331(代表)
工場：大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

角筈支部(専門取扱営業所)
東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内
電話(352)1556・1557